

世界政治の理論と現実

——国際関係理論をめぐる論争から——

星 野 昭 吉

はじめに

我々は一体、どのような世界政治の中で生存しているのだろうか。我々はその生命、価値、生活を左右する世界の在り方をコントロールできないばかりか、世界がどのように形成され、変動しているのか、その現実世界は何かを正確に記述し、適切に説明し、妥当に予測することはできない。それらを解き明かす国際関係理論は混迷状態にある。S・ストレンジのいうように、今日、政治的、社会的、経済的にある国と別の隣国の権威との間の国境によって分けられた世界という仮説の上で過去百年の間に発展してきた社会科学は、転換と不確実な時に置かれている。我々はその仮説がもはや通用しない新しいグローバルな政治経済への転換期に生存している。しかし、我々

は、新しいものと古いものとがどのように本質的に相違しているのか、また、どのような仮説がまだ正当なものであり、さらに、何が必要とされているのかについても不確実である。⁽¹⁾

国際関係論や国際政治学が自律的な学問として出発してから八〇年近くも経過した今日の世界政治（国際政治）の現実には、一九二〇年代のそれとは大きく異なり、その巨大性、複雑性、流動性、日常性、そして不確実性が支配的になっている。我々の日常生活、生存を決定的に左右する世界政治の重要性は認識できても、その現実を正確に記述し、適切に説明し、妥当に予測しうる理論は存在していない。世界政治の現実と理論とが一層乖離し、現実も理論も混沌の状況にある。この理論の混沌状況は、単にさまざまな理論の多元化を意味するのではない。たしかに、これまでも現実主義と理想主義との間で第一の大論争、伝統主義と行動科学との第二の大論争、三つのパラダイム間の論争、現実主義とグローバリズムの論争、新現実主義と新自由主義との論争、今日の実証主義と脱実証主義との第三の論争が行われてきた。しかし、現実主義や新現実主義がこれまで国際政治学の中で支配的地位を占め、それらは批判を受けても、それらに取って代わるパラダイムの構築は容易でなかった。このことは、それら実証主義理論の有効性、妥当性の存在を意味するものではない。それは、理論が国際政治の現実にはAである、このAはBの原因で起こった、という現実を単に説明するのみではなく、その理論それ自体がAの現実を構成する機能をもつという理論の特性にも関連している。

国際理論をめぐる論争にとって重要な課題の一つは、理論（知識）と現実（実践）とがどのような関係を構成しているかの解明である。すなわち、国際理論は国際的現実を生み出し、またそれを支える。一度理論がコモンセンスとして確立してしまうと、理論はそれによって単に知りうるものばかりか、知覚できるものをも積極的に描くことになるので、驚くほど強力なものとなる。認識論にとって論争に重要な問題は、政治的实践にとってもきわめて

重要である。「理論は単に説明したり、予測したりするものではなく、理論は人間活動や干渉にとってどのような可能性があるのかを教える。また、理論は説明可能性ばかりか、我々の倫理的・実践的範囲をも規定する。」⁽²⁾

より積極的というなら、どの理論も一定の自己充足的予言機能をもっている。Aという現実が存在していなくても、A理論自体がAという現実を生産することが多い。もちろん、その理論はまったく現実と関係なしに構成されるというのではなく、その現実を歪んで反映することはあっても、一度形成されると、それが一人歩きして現実を規定し、現実を生産するようになる。国際システムのアナキー仮説、ドミノ理論、核抑止理論に明らかのように、政策決定者がその理論を前提として政策を決定することが、結果的にこの理論の描いた結果が現われることになる。

また、理論とは、現実とかけ離れたものであっても、その内容と特徴はつねにその時代の制約を受けたり、その時代の要求に答えるものとなる。そもそも第一次大戦の経験によって、大衆の平和を希求する情熱、アメリカによる財政的基盤の確立、平和を可能にする相対的安定という政治状況などから、国際関係理論は著しく理想的、規範的なアプローチであった。その後三〇年代に国際政治が不安定となり、軍事的紛争の起こる可能性が高まってくる。厳しい現実を反映して、現実主義的アプローチが支配的となる。科学的理想主義やかなり初期の段階での機能的アプローチは第一次大戦後の産物であったが、第二次大戦後ならび初期冷戦時に生まれた安全保障の脅威は、アメリカで現実主義を広げる刺激を提供し、J・ハーツの安全保障のディレンマという考えや抑止問題の研究に力が入られた。六〇年代と七〇年代に従属や新帝国主義、相互依存の分析が試みられた。また、軍事的二極と政治的多極というシステム構造への関心が高まり、それらの反動としての政策決定過程への流れが、新現実主義を、またそれと新制度主義との論争を生んだ。九〇年代の関心は冷戦構造の崩壊で多国間主義へ向けられた。⁽³⁾このように現実と

理論は関連性をもつものであるが、このような時代背景や条件がそのまま適切かつ必要な理論を生み出すとは限らない。

さらに、どの理論の構築も、一定のイデオロギーや価値観と結びついていることが理解されるべきだ。R・コックスは、理論の果すべき役割から、また、何のための理論かの目的から、国際理論を問題解決理論と批判理論とに区別する⁽⁴⁾。この二つの区別は、理論は中立的・抽象的内容をもつものではなく、その理論構成者や使用者の一定のイデオロギー、価値、文化などが潜在化していることに注目するからである。理論はつねに誰のために、また、ある目的のために存在していると見るべきだ。前者の本質は、特定のイデオロギーや価値を前提に提起された問題を解決するのに適した指針を打ち出すこと、すなわち、既存の支配的な社会的・権力的関係、制度、秩序に対して混乱条件を生み出す特定の原因を効果的に解決することを志向する。他方、後者の目的は、理論形成の基礎をなす観点、イデオロギー、価値を明らかに自己認識し、同時に自己の観点と他の視点との関連性をも正確に認識することにある。すなわち、既存の社会秩序からの一定の距離を保持し、その秩序を容認することなく、その秩序がどのように形成されたかを問題にすることによって、それを批判することを志向する。その上で、その秩序変革を可能にする条件を適切に提示することをめざす。前者は現状秩序から利益を得ようとする人々のめざす理論であるところから現状維持志向理論と、また、後者は現状秩序から不利益をこうむり、それを変革する中で自己の利益を実現しようとする志向する現状変革志向理論と名付けてよい。いわば理論とは、客観的、中立的、所与のものではなく、特定の価値を体現し、作られたものに他ならない。

さらに、現実世界が構成されるのは、一定の、特定の思想、メタ理論(それはイデオロギーとも結びついているが)によってであり、それらが結果的に現実内容を規定する。その仮説に見合った範囲の事実が現実であって、そ

れ以外は現実ではないとして、無視され、拒否されることになる。例えば、実証主義理論にとって、科学性、実証性、合理性、経験性に見合ったものが現実であつて（この場合の現実はずしも客観性、中立性、実証性をもっているとは限らないし、またそれ自体が作られた現実ではないが）、それ以外は現実ではなくなる。したがつて、三つのパラダイム間論争は、論争としての大きな意味をもたなくなる。何故ならば、それぞれのパラダイムは種々の現実を全体の現実の一部として描き、説明しているだけにすぎない。全体の中の部分の現実への異なるアプローチをめぐる対立でしかない。⁽⁵⁾

そうであるならば、実証主義と脱実証主義との第三の論争は、論争としての意義は大きい。実証主義としての三つのパラダイムに挑戦する脱実証主義は、前者の論争によって規定された狭いアジェンダを拡大したり、変更したり、また新しいものを発見する可能性を高めることができる。三つのパラダイムが描くことができるのは存在論的に、イデオロギー的に特定の国際的なるものの絵でしかない。それに単純な理論的構造の反映である。⁽⁶⁾

以上のような国際関係理論は、一定の自己充足的予言性、時代性、イデオロギー性、メタ理論性あるいは認識論的、存在論的条件によつて、現実世界を構成したり、現実世界を変革したり、現実世界に大きな影響を及ぼしたりする。すなわち、「現実の世界と知識の世界に連続的な相互作用がある。……我々がいかに世界を理解するかは部分的に我々がいかに世界を規定するかに依存している。」⁽⁷⁾ 国際理論は、現実世界の説明ばかりか、現実世界の構成機能を果していることを認識すべきである。

したがつて、我々が現実世界の適切な再構成を可能にするためにどのような理論が必要であるかは、何よりも、現実世界と理論とがどのような関係を構成しているのかを解明しなければならぬ。そのことは同時に、国際理論とは何か、理論の構成要件（基準）とは何か、理論の機能は何かを問うことに他ならない。こうした作業を通し

て、現在の理論をめぐる論争状況と、また、どの理論が望ましいのか、有効性が高いのかの問いに回答を与えることが可能となる。

本論の目的は、理論の本質とその構成要件を明らかにした上で、これまでの国際理論をめぐる論争の内容と意義を検討することで、現実世界の適切な再構成を可能にする理論の在り方を求めていく。そのため、一では、国際理論の意味、理論の構成要件を考察することで理論と現実との関連を検討し、二で、三つのパラダイム間論争を、三では、新現実主義と新自由主義との論争を、四において、実証主義と脱実証主義との第三の論争を検討し、五では、論争の意義と現実世界を再構成しうる一般理論の構築の必要条件を考察する。それぞれの論争は理論それ自体が多元的であるため複雑な構造をもっているので、ここでは、それぞれの理論を詳細に見ても意味がないので、理論の大枠を検討する。

一 理論の意味とその構成条件

国際関係論や国際政治学に限らず、経済学、社会学などの社会科学は、いくつかの理論の蓄積から成り立っている。しかし、国際関係論には、現実主義理論のように支配的理論といわれたものは存在してきたものの、一般理論は存在していない。明確で、体系的な理論に代って、理論は、概念、法則、モデル、概念的枠組み、アプローチ、準理論などの用語と混同して使用されており、国際理論とは一体何を意味するのか、有効な国際理論は存在しうるのか、また、存在すべき必要なものなのか、理論は現実世界に対してどのような機能を果たすのか、どのような内容の理論を構成すべきか、その理論構築の必要条件と十分条件とは何か、などに適切な回答が与えられてこなかった。

た。国際政治現象はつねに変動し、複雑化し、巨大化し、不確定化するだけに、一般理論の構築は一層容易でないもの、その構築の試みは国際政治学の学問としての体系化と、その存在意義の証明にとって不可欠の作業である。⁽⁸⁾

C・マクレランドは一般的な意味での理論に次のようないくつかの定義を与えている。

- (1) 理論は事実を組織化するための枠組みである。
- (2) 理論は行動の指針である。
- (3) 理論は物事がいかにあるべきかについての一組の記述である。
- (4) 理論は思弁的な思惟であり、現実世界との繋りをもたないものである。
- (5) 理論は抽象である。⁽⁹⁾

それらの理論の定義は一般的なものであり、国際理論の場合にはその意味を科学性や経験的基準に求める必要がある。理論は、現実に対する単なる主観的理解、非科学的理解、規範的理解ではなく、科学的理解を要求される。もちろん、後に詳述するように、自然科学における科学的・実証的理解を意味するものではない。理論は本質的に、多種多様の現実（事実）を整理し、その中から選択し、それを秩序だて、意味づけする枠組みとして理解してよい。Aの理論は、Aという現実を選択し、秩序だて、解釈する枠組みを提供する。Bの理論は、Bという現実を構成する枠組みとして機能する。理論の機能は、現実のもっている意味、現実を生み出す原因と結果、現実が展開するメカニズム、その現実の将来の方向性、などについての我々の理解を可能にすることに求められる。

J・バスケズによれば、国際関係研究にとって適切である六つの基準がある。それらは科学哲学における基準である。よき理解は次のようなものであるべきだとする。

- (1) 正確であること。
- (2) 誤りを立証すること。
- (3) 大きな説明能力を明らかにできること。
- (4) 研究プログラムによって退化することに反対する進歩性をもつこと。
- (5) 他の領域で知られたことと一貫していること。
- (6) 適当に簡潔で、エレガントであること。

すなわち、正確性、立証性、説明能力、進歩性、一貫性、簡潔性である。⁽¹⁰⁾

しかし、この定義は必ずしも適切なものではない。何故ならば、何に對しての正確性か、どのような説明能力か、どのような意味の一貫性かが不明確である。拙著『国際関係の理論と現実』の中で明らかにしたように、理論の有効性の三つの基準は、現実(事実)の正確な記述、現実の適切な説明、そして信頼にたる現実の予測である。⁽¹¹⁾理論構築の第一の条件は、現実の世界で過去に起きたもの、また、現在に存在しているものを客観的かつ正確に記述することである。すなわち、国際政治現象の実像を示すことだ。もちろん、すべての複雑な現実世界を客観的かつ正確に記述することそれ自体は容易ではなく、誤認があることも否定できない。現実の記述それ自体は、ある主体が自分のモノサシで客観的な現実として考えて、選択したものが一般的である。その意味で、絶対的客観性に基づく現実の描写ではなく、相対的客観性であることが普通である。問題は、正確な記述ができたか、できなかったかではなく、それを志向するかしないかである。「我々の思想が世界をつくり、データををつくり、我々は歴史的に考⁽¹²⁾えるからである。」現実を描くそれぞれの理論は、各自のカメラのアンクルからの現実のそれであって、同じアンクルからのものではない。

第二の理論の要件は、過去の現実が何故生じたのか、現実が存在しているものが何故生じたのか、の適切な説明を提供することである。これは、Aという現実の原因B→結果Aを理由づけることを意味する。この場合、東西冷戦構造の崩壊の原因が物語るように、因果関係がきわめて複雑であるため、それを簡潔かつ適切に明示することは困難である。国際政治現象が、人間の意識、価値、イデオロギー、行動の産物である以上、原因が多元的で、単純なものではないことはいうまでもない。その原因自体がつねに変動しており、また、結果を生み出すそれが複雑で、多元的である。そのため、説明的条件は、第一の現実が存在したもので、存在するもの、存在しうるものの記述の条件と有機的に関係するものであり、前者は後者を前提としている。適切で満足できる説明のための理論は、簡潔で、強力で、操作的で、経験であるべきだ。

第三の理論の構成要件は、将来に生起しうるもの、存在しうる現象を妥当に予測する能力をもつことである。予測能力は、第一の正確な記述、第二の適切な説明要件と有機的に結合するものであり、前二者の条件の能力なり、有効性が高ければ高いほど、予測能力の妥当性が高いものとなる。冷戦構造の崩壊が予測できなかったことは、冷戦構造それ自体の正確な記述、適切な説明能力の弱さと一体のものである。人間行動の予測については確実なものではありえず、さまざまな程度での可能性の判断に他ならない。

だが、将来の起こりうるある結果をコントロールしうる可能性を提供できる予測条件は、科学的理論の必要条件といえよう。Aという記述、Aという説明、Aという予測と同時に、Aをコントロールして、Bという現実の形成の予測も重要となる。可能な将来の状態の予測は、人間行動の主要な源泉と同時に、その指針ともなりうる。この予測が完全に妥当なものでなくても、実際の政策決定・遂行に対して一定の意味をもつ。予測の重要性は、可能な諸傾向についての単なる確実な把握にあるというよりも、それらの諸傾向に関する我々の知識を増大させ、可能性

の範囲と具体的な行動志向性とを決定するに際し、容易にすることに意義がある。したがって、予測性は国際理論の規範志向性と、正確な記述性、適切な説明性とを連続させる重要な役割を果すのである。その妥当な予測能力が高いことが、その理論の有効性の高さを示すものであり、また、長期にわたって支配的理論となりうる。

国際理論の科学性の意味は一般に、そうした三つの条件をもっているかどうかの基準によって規定されることが一般的である。理論の在り方はその科学志向性の程度、精巧度、範囲、目的によっても考察されるが、理論の良し悪しの基準は、その有効性によって判断されるべきである。良き理論とは、データを組織し、分類する手段を提供することが確実に可能かどうかによって判断される。適切な理論なしには、あらゆる事実がすべて重要なものとなったり、重要なものでなくなったりして、その位置づけと意味づけは困難なものとなる。結局、「理論は、それがいかに選択や分類を上手に提供するかに依りて判断されるし、また、研究を導くことにおいて有効であることによつて、また、記述、説明、予測における正確さと能力によつて評価される。」¹⁹⁾

以上の記述、説明、予測の三条件は理論の必要条件であるものの、さらに理論の十分条件として、規範性、処方性(政策志向性)の要件が要求されよう。国際理論にはその程度がどうであれ、あるべき現実、好ましい現実、つまり規範的現実が内包されている。それは正確な記述、適切な説明、妥当な予測という要件もそれら自体、一定の規範の影響を受け、現実が規範によつても部分的に規定されている。現実主義、新現実主義、自由主義、マルクス主義理論も何らかの規範性を内在させている。換言すると、現実とは、規範や価値を通して判断され、構成されている。同時に、現実それ自体が形成され、発展、変容していく過程は、一定の規範の影響を受けている。現実とは規範的現実なり、現実的規範として理解されるべきだ。

この規範性が第四の理論の要件である。現実、事実、でき事の背後には、規範、価値、倫理的判断を通しての存

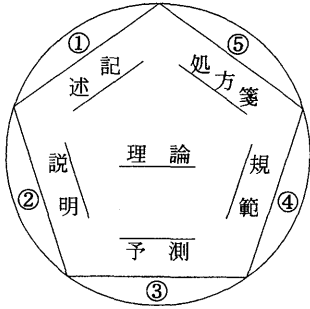
在すべきもの、望ましきものの規範性が入り込んでいる。ある事実やでき事を選択し、それに一定の意味を与え、現実的なものと判断を下す以上、規範的条件がつねにつきまとうことは避けられない。今日のように、世界政治が巨大化し、複雑化し、流動化し、不確定化している状況が常態化していることを容認するならば、むしろ規範的条件を積極的に処理しなければならない。

第五の国際理論の構成要件は、第四の規範的要件と直接的な関連性をもつ。規範を前提として、規範を実現する、あるいは好ましくない事実やでき事、状態をコントロールする処方箋（政策志向性）である。ある目的をいかに達成するか政策科学は、規範的条件と同様に、科学的三要件と異質の次元のものと理解されているようだ。この処方箋は規範ばかりではなく、とりわけ予測要件と直接結びついている。処方的要件が存在しなかったり、弱い場合に、現実を再構成することが困難となる。処方箋は、今日のグローバルな危機構造が支配する世界政治であればその変革にとって一層重要なものとなっている。

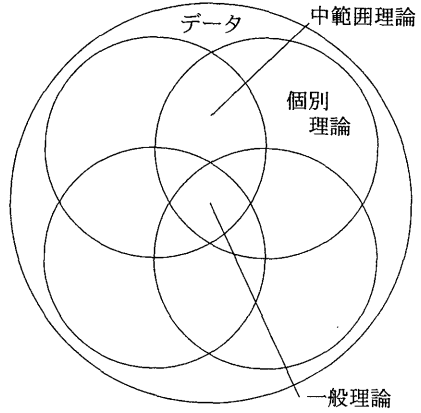
世界政治の社会的現実、存在するもの、現実的なもの、存在しうるもの、可能なもの、存在するだろうもの、ありうるもの、存在すべきもの、望ましきものなどは、歴史、術、科学、哲学、政策に対応しうる。

我々が国際理論がいかに有効であるかという基準は、第一図が示すように、以上の五つの条件が備わっているかどうかであるが、有効性の程度はどのような条件が規定するのか。五つの要件をもつことがそのまま国際政治の現実にとって完全な一般理論をいうのではない。その社会的現実のどの部分なのか、より大きな領域なのか、すべての領域なのかで、個別（部分）理論、中範囲の理論、一般理論と区別されなければならない（第二図）。これまで国際関係において一般理論は存在していない。せいぜい中範囲理論である。国際政治全体の現実の体系的描写、説明、予測、規範、政策に役立つような包括的、理解可能な、一貫性のある自己修正可能な知識体系は成立していない。

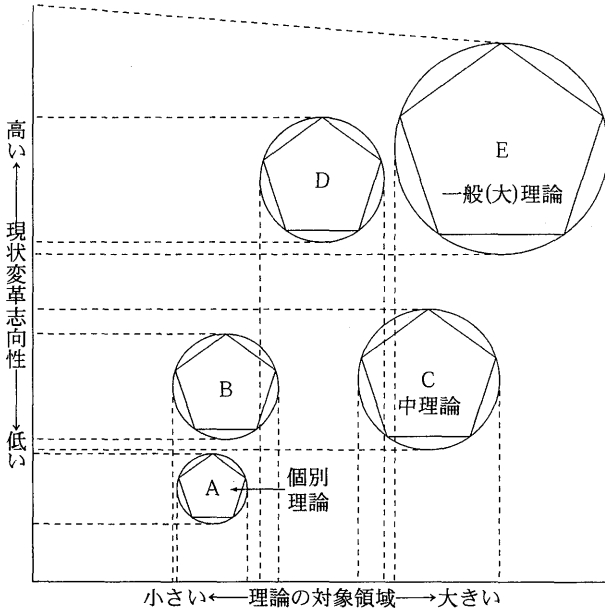
第一図：理論の構成要件



第二図：理論の形態



第三図：理論の適切性



国際理論がどの程度有効なものであるかを定める基準は、単にその理論がより多くの現実を対象に組み入れていくかどうか、とりわけ包括的であるか、の量の問題のみではない。国際関係理論の有効性は、どれだけ現実を変革してより望ましい現実のものに変えていく可能性をもっているかどうかの問題である。世界政治はつねに変容しており、その変容は現状維持勢力と現状変革勢力の弁証法的運動に他ならない。第三図の示すように、国際理論の有効性は、現状変革の必要性と可能性をどれだけ提供しうるかの能力に依存している。すなわち、現実をどれだけ変動的、変革的現実として再構成できるかが重要である。

我々は、ある国際理論の有効性を検討する場合に、その理論の最小限度の要件としてその基準（構成）条件を論じ、また、大理論、一般理論の要件として、その包括性と現状変革可能性がその理論の有効性の程度を決めるものと見た。しかし、何故そうしたことになるのか明らかにしていない。いわば国際理論が現実を再構成しうる能力をもつことを証明するには、はじめに述べたように、理論それ自体と現実、実践との関連性を検討しなければならぬ。そうすることで、国際理論とは何か、どの理論が最良で、最も適切な理論なのか、また、それは何故かの問題に答えることができる。

M・ザレウスキーは、手段としての理論、批判としての理論、日常の実践としての理論の三つに分ける。第一は、理論と国際政治の現実やできごとを意味づけるために使用されるものである。ソ連の新思考外交はどのようなものであり、何故それが遂行されるようになったのか、東西冷戦構造の崩壊とはどのようなものであり、それが何故崩壊するに至ったのか、湾岸危機・戦争はどのようなものだったのか、それが何故生じたのか、などの現実世界のでき事を記述し、説明する手段として理論は使用される。この手段としての理論は、理論の構成要件のうちの記述と説明能力を強調する。

第二の理論は、現実世界がどのような状態だったのか、何故そうなったのかを記述、説明するだけでなく、それらを一定の価値基準によって批判する。今日の現実世界は支配従属構造の支配する南北問題が存在している。そのため、とりわけ第三世界の貧困、経済的未発展、飢餓、栄養失調、社会的不正義、物理的暴力、人権の抑圧が一般的であるという現実を描き、説明する。しかし、その現実世界を不可避として理解するのではなく、その現状の克服の必要性と可能性を提示する。批判としての理論は、R・コックスのいう批判理論と同様に、理論と現実世界とは不可分の関係として捉え、理論が現実世界を構成すると見る。理論の構成要件の①、②、③ばかりか④と⑤も重視する。そのため、道具としての理論は、世界の現実を記述、説明するのみであり、その現実世界を肯定し、維持する志向性が高い理論といえるが、批判としての理論は本質的に、現実世界の批判、変革を求める性向を内在している。

三つめは実践としての理論である。第二の批判の理論と多くの点で融合しているが、理論を世界についてただ単に意味づけることができるのかの厳しい基準から成り立っている客観的な道具として見ない。この理論は、理論を使用するというよりも理論化することに注目する。理論化することは、生活様式、生活形態、我々が毎日行なっているものを意味する。このことは、現実世界を再構成する場合に、外交官、軍隊、政策決定者の考え方にのみ焦点を合わせるのではなく、一般の大衆がどのように考えるかを重視する。理論はただ特定の理論家や政策決定者の占有物ではなく、一般大衆のものである。何故ならば、大衆は明確で、また意識的でなくとも一定の理論をもって現実世界を描き、説明し、予測することで、現実の構成に参加しているからだ。⁽¹⁵⁾

要するに、国際理論と現実世界との関連をどう捉えるかによって、説明的理論、構成的理論、また両理論の複合理論に分けることが可能だ。この問題は今日の国際理論に直面するメタ理論の問題である。基本的には、国際関係

の現実の説明を提供しようとする理論と、その現実の構成体としての理論の二つに分けることが可能だ。基底ではこの問題は、社会世界はどのようなものかをめぐる相違の問題にまで行きつく。

ここでは、国際理論は現実と結びついており、説明的機能と構成的機能の両者をもっているから見よう。その理由は前述したように、第一に、そもそも理論の五つの構成要件のうち、正確な記述、適切な説明、妥当な予測といった場合でも、それら作業はその理論の形成者、その使用者の客観性、価値観、情報、特定の知識に基づいて行なわれ、理論の形態と内容を反映しない客観的な現実の説明は不可能であるからだ。単にある現実をAである、Bである、A—Aの因果関係で、またB—Bの因果関係で生起したという説明で終らず、その理論にとってAを構成し、また、A—Aの因果関係を構成しているだけである。

五つの構成要件を備えている理論であっても、それが現実世界の客観的な記述、説明、予測を可能にするのではない。すでに見てきたように、それら要件をもつ理論の背後に、その理論それ自体を構成する価値観、哲学、思想、イデオロギー性、主観性、あるいはメタ理論が存在している。そのため、理論の有効な基準が完備されていても、それによって自動的に現実世界の正確な記述、客観的説明で現実が構成されているのではなく、メタ理論、イデオロギーを反映した現実世界が生産されることになる。また、特定の知識や情報に基づいて創られた理論も同様な機能をする。第四図が示すように、メタ理論やイデオロギーAによって理論Aが形成され、その理論Aによって現実Aが生産される。

現在、既存の政治体制の中で利益や価値を享受している人に、集団、政策決定者、大国などは、その政治秩序の現状を維持しようとのイデオロギーが現状変革志向理論を支配し、現実世界を構成することについてはすでに指摘してきた。また、反対に、既存の政治秩序の枠組みの中で自己の利益や価値が擯取されていたり、制約を受けてい

たり、拒否されている場合や、その政治秩序に不満を抱く場合には、その現状の変革（打破）を求めるイデオロギーが、現状変革志向理論が、現実の記述、現実の説明、将来の現事の予測、規範、処方箋を主張することで、現実を再構成する。現実世界は、それら二つのイデオロギーを反映した理論の弁証法的発展として現実世界が構成されている。実際には、現状維持志向理論が現状変革志向理論を凌駕して、現実世界は前者が描き、説明し、予測する現実を反映しがちだ。そのため、現状維持志向理論が、現実世界を後者以上に有効に描き、説明していると正当化されがちである。後者はむしろ、現実離れの理想を描き、説明していると批判されることになる。⁽¹⁶⁾

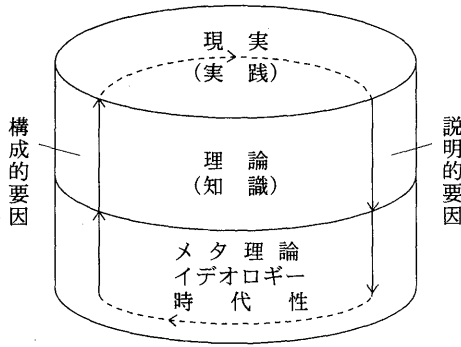
とりわけ現実主義や新現実主義の実証主義理論の背後に存在するメタ理論やイデオロギーは、西欧の実証主義の伝統である二元論（二分法）である、国際政治と国内政治とを理論的に区別することになり、その区別は絶対的な合理性や主権性の考え方を支援することに奉仕する。構造／主体、全体／個、権力／規範、男／女、対立／協力、政治／経済、先進／後進、秩序／無秩序、政府／無政府などの二分法は現実を描き、説明し、予測する能力を喪失させる。この二元論は、現実世界、すなわち、社会科学者つまり主体の理論的構成物から区別された客体の存在を前提としている。客観的現実を構成することは容易でないのみか、何が客観的現実かを認識させることも困難にする。⁽¹⁷⁾

現実世界の構成は「はじめに」で見たように、理論の自己充足的予言機能にもよっている。アナキー仮説に立脚する現実主義、新現実主義理論がこれまで国際関係論の中で、批判を受けながらも支配的地位を占めてきたのは理論の自己充足的機能にある。国際システムが主権国家による無秩序、無政府なシステムであることがいかに現実世界を正確に記述し、適切に説明し、妥当に予測できないものであっても、大国なり、その政策決定者がそのアナキー仮説を容認することによって、その中で自国の国家利益や安全保障を確実なものにする具体的な政策を立案

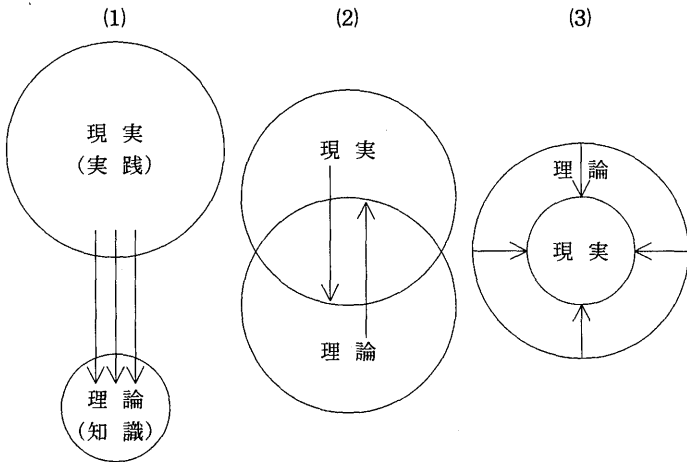
し、遂行することで、アナキー・システムが現実のものになる。現実となることによってアナキー仮説は正当化されることになる。権力政治は戦争を引き起こす助けとなる行動を助長する世界についてのイメージである。勢力均衡や同盟も平和よりも戦争を導く一部分である。⁽¹⁸⁾ また、ドミノ理論も、現実には北ベトナムから南ベトナムへの介入、民族解放戦線への支援、共産主義の拡張などの実体がなくとも、それを前提としてアメリカがそれに対応するために軍事介入することで、結果的に北ベトナムによる南ベトナムへの介入やベトナムへの支持が実現することになる。このように、どの国際理論も現実を構成する自己充足的予測機能をもっている。

以上のように、国際理論の現実規定性、メタ理論、イデオロギー性、規範性、自己充足的予言性などが現実世界を潜在的に構成している。「理論は事実のあとに生じるものではない。代って、理論は何が事実であるかを構成し、規定する場合に重要な役割を果す。」⁽¹⁹⁾ しかし、そのことは、現実世界が理論に影響を及ぼさないとか、理論を構成しないことを意味しない。現実世界が理論を構成するのは、前述のように、理論は現実の時代性を反映しており、理論が形成、発展、変容、衰退する過程をたどるのである。第一次大戦後の相対的安定期を受けて理想主義的アプローチが、不安定期の三〇年代以降に厳しい現実主義的アプローチが支配してきたことが、またその後のさまざまな論争の展開が示すように、理論の存在を通時的に見ればその時代性を十分に理解できる。また、何よりも理論に一定のイデオロギーや価値観が存在していること自体、現実の存在に拘束されていることが分かる。イデオロギーは現実の反映に他ならない。第五図が物語るように、そのように考えると現実と理論は一方通行の関係でなく相互関係として把握しなければならない。

第四図：メタ理論—理論—現実



第五図：理論と現実



二 パラダイム間論争

国際関係論における理論をめぐる第一の論争は、一九三〇年代末から五〇年代はじめにかけての理想主義対現実主義の論争であり、第二の大論争は、五〇年代末から六〇年代の伝統主義と行動科学主義との間で行なわれたものであった。第一次大戦後に成立した国際関係論が著しく規範的・理想的アプローチが支配的であったことは当然であった。戦争の最大の被害者である大衆の平和を希求する情熱が国際関係論の誕生を促し、その内容を大きく規定した。また、戦争のない平和な世界の確立という理想の実現を支えたのは、大規模な国際組織（国際連盟）と国際法の支配、ヴェルサイユ体制やワシントン体制、不戦体制、アメリカの経済力などの現実の平和的基盤の存在であった。理想主義的アプローチは、人間は合理的存在であり、合理的国際機関や国際法によって、人間社会で平和の実現が可能であるとする。その規範的・理想的志向性が現実のものとなったのは、それを可能にする国際政治の現実があった。それだけに、その現実が変容して、理想主義的アプローチと現実との不一致が大きくなることによって、その新しい現実に対応した現実主義的アプローチが抬頭してくるのは自然であった。一九二〇年代の相対的安定期から三〇年代の不安定期を迎えた国際政治を理想主義が正確に記述し、適切に説明し、妥当に予測することができなくなった。世界大恐慌による経済ブロック化と対立、ヴェルサイユ体制やワシントン体制の動揺、日独伊の連盟からの脱退による連盟の機能の低下、各国大衆のナショナリズムの高揚と好戦世論の形成、日独伊の現状打破勢力の抬頭と、平和を支えてきた基盤を大きくつき崩すことになった。したがって、理想主義的アプローチは規範や倫理を重視し、冷厳な権力闘争の出現を招き、現実を記述し、説明し、予測する能力をもっていないとの批

判を受けた。

理想主義を支えた諸条件の喪失はそのまま、現実主義を支える条件の形成となった。現実主義理論は、現実的なもの、存在するもの、存在したもの、の科学的記述と説明と予測を志向する。その現実、存在するものは国家利益と権力をめぐる権力闘争が強調される。そして厳しい現実を証明したものが、まさに第二次大戦の勃発であり、その後の冷戦の展開である。こうした理想主義が描く図式が通用しない現実の展開の中で行なわれた第一の大論争も、文字通りの理想主義対現実主義というよりも、理想的現実主義対現実主義の問題であり、両者の間では相違点よりも類似点の方が多いものだった。両者は非対称的なパラダイム関係を構成してはいなかった。

その後、現実主義理論が国際関係論において中核的な地位を占めていく中で、五〇年代末に、国際政治の本質に關してではなく、その分析の方法をめぐる挑戦を受け、伝統主義と行動科学主義とで第二の大論争が行われた。行動科学理論からすると、国際関係における有効な理論化は、適切なデータの収集、正確さや科学的厳密さによって、経験的妥当性を有する仮設を生み出すことが重要となる。権力や国家利益の不明確な概念は、検証しうる厳密な分析にとって使用できない。伝統主義理論は、明確さを可能にする基盤として数量化が必要であることを認めないし、また、明確な原因—結果の構造をもっていない。現実世界に関する意見のモデルと、モデルそのものに関する意見とを取りちがえており、知的道具による知識獲得の可能性を否定しているという。

伝統主義理論によると、国際政治現象は結局、人間が構成する現象である以上、著しく多元的で複雑なものになるため、そこに不確実性、偶然性などが支配的となり、厳密な意味での正確な記述、適切な説明、妥当な予測は国際政治の世界においては容易ではない。そのため科学的方法や数量化は一種の知的遊戯になってしまい、現実の内面を十分に理解できない。科学的知識は人間の目的や価値を含む領域においては限界があり、また反対に、厳密な

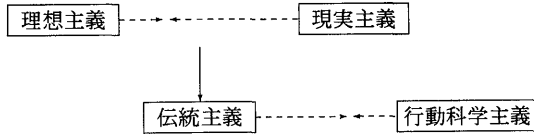
手続きに対応しえない現象を切りすててしまうことによって、かえって国際関係の本質を把握しえない。したがって、行動科学理論は現実を分析する道具として有効なものになっていない。

行動科学理論は、科学のパースペクティブを採用することによって、厳密な分析対象を設定し、再帰パターンを重視し、説明的予測理論を志向しているのに対し、伝統主義は、歴史的パースペクティブを適用し、国際関係における相互の個別性を強調し、知恵や直観能力の必要性を主張する。伝統主義理論は、社会科学の科学性を否定してはいないが、行動科学は自然科学における厳密な科学性を求めている。⁽²¹⁾

この第二の大論争は、国際政治の本質をめぐるものではなく、方法論をめぐる論争であったため、本質についてはむしろ伝統主義理論と対立するものではなく、国家の行動様式、政策決定過程、勢力均衡、同盟、軍拡競争などについての現実の理解については大きな差は見られない。問題点は、その現実をどのような方法によって記述し、説明し、予測するかについてであるところから、論争としての大きな意味を弱めていく。それをさらに影響づけたのは、脱行動科学革命であった。行動科学理論は、厳密な科学的方法を適用しようとし、かえって現実離れし、また、緊急な現実的社會問題に関心を向けず、社會に対して具体的に行動していないことから、學問的社會的關連性と行動性を求める革命がむしろ起きたことである。國際政治の本質についてはますます傳統主義理論のそれに傾斜していく。両理論は非対称性を構成するのではなく、相互補完關係にある。第二の大論争は大きなでき事といえるようなものではなかった。⁽²²⁾ 二つの大論争とも實際には論争といえるものではない。方法論的問題に限定されたもので、理論についてはいえない。⁽²³⁾

二つの論争とも結果的には、現実主義が勝利を収めたように、一九四〇年代以来、現実主義は國際關係論において支配的パラダイムの地位を継続したといつてよい。しかし、支配的パラダイムであったことが、國際政治の現実

第六図 第一の大論争・第二の大論争

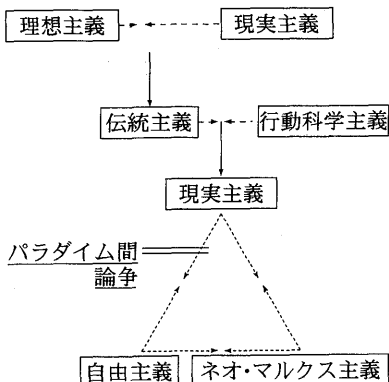


をより正確に記述し、適切に説明し、また妥当に予測する能力をもっていたことを意味するものではなかった。現実主義理論はとりわけ権力の問題についてきわめてナイーブであり、また、規範的でさえある。²⁴⁾

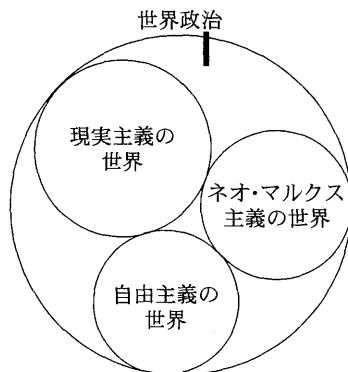
七〇年代に入り、現実の国際政治が大きく変容する。すなわち、冷戦構造の変容、緊張緩和、経済的相互依存関係の増大、多元的な脱国家主体の出現とその役割の増大、南北問題の深化、人口問題や資源・エネルギー問題など、現実主義理論の説明とは一致しないさまざまな国際政治現象や問題が出てくる時に、現実主義は二つの理論（パラダイム）からの挑戦を受けた（第七図）。その一つは、国家間の権力関係を強調する現実主義に対し、多くの下位国家主体、脱国家主体からなる脱国家関係主義や多元主義、相互依存関係に注目する自由主義からのものである。もう一つが、中心—周辺の関係を支える支配—従属構造の存在を明示するネオ・マルクス主義からの挑戦である。

前者の自由主義パラダイム²⁵⁾は理想主義の流れに入るものであり、国家中心的・安全保障（軍事力）中心的・紛争中心のパラダイムである現実主義に挑戦したのは、現実の国際政治が現実主義パラダイムでは正確に記述し、適切に説明し、妥当に予測することができない現象の多発に直面したからに他ならない。経済的相互依存関係がグローバルなレベルで拡大するに依りて、脱国家主体が構成する多元的な関係チャネルに直面して、国家が国際政治で重要な主体としての地位を弱めた。国家間関係チャネルは脱国家間関係チャネルによって大きな影響力を受けることになる。また、これまでの国家間関係の主題であった安全保障や軍事問題ばかり

第七図：パラダイム間論争



第八図：パラダイム間論争と現実世界



か、経済問題、社会問題、文化問題、環境問題、科学技術問題などが多元的に展開するようになった。したがって、脱国家間関係が大きな存在となり、大きな勢力となった世界政治において、政府の行使する軍事力は問題解決の有効な手段ではなくなった。このパラダイムは、脱国家主体中心・多元的価値中心的・問題解決中心的パラダイムであるといえる。⁽²⁶⁾

現実主義へのもう一つの挑戦パラダイムであるネオ・マルクス主義パラダイム⁽²⁷⁾はどのような内容をもっているのだろうか。国家間の権力関係によって現実世界は描けない。現実主義パラダイムにおける国家とは異なり、その世界政治における国家の地位は、政治的・経済的利益を實現する主体として存在し、グローバルな階級的支配集団に奉仕する従属者となる。このパラダイムでは、国家やその他の脱国家主体が支配・従属構造を支える世界システムの中でどのような拘束を受けるかが主題となる。先進資本主義国中心と発展途上国世界の従属的周辺とが支配・従属構造を形成している。世界システムの中心・周辺関係（あるいは中心・準周辺・周辺関係）は国内システムにも存在し、グローバル・システムの支配・従属関係を維持する。中心の中心が周辺の中心を橋頭堡とすることで、周辺国の支配を可能にする。したがって、この世界政治過程

では中心がこうした帝国主義的構造を維持することによって、周辺へ浸透し、周辺から搾取し、周辺を分割支配する運動が、反対に、周辺がこの構造に挑戦し、構造を変革していく運動が展開する。このネオ・マルクス主義パラダイムの描く支配―従属構造が、すべての主体の行動の様式、国家間関係のパターンを条件づけることから、構造主義と呼ばれることも、また、その構造を革命などの過激な方法で打破する志向性をもつことから過激主義といわれることもある。要するに、それは、階級中心的・経済価値中心的・支配―従属構造中心的パラダイムといえる。⁽²⁸⁾

第八図が示すように、對抗する三つのパラダイム間の関係は、必ずしも非対称的なものではなく、むしろ補完的なものである。何故ならば、各々のパラダイムは世界政治の一部の世界を構成しているにすぎないからである。各々のパラダイムは、それ自身の基本的概念、行動主体、主要な問題、作用する主要な過程、主要な結果に依存している。⁽²⁹⁾ それら三つのパラダイムはほとんど通約できない。というのも、それぞれの判断の基準や固有の言語をもっているからに他ならない。⁽³⁰⁾ 三つのパラダイムは、それぞれ固有の特徴をもつて、世界政治の異なる領域を対象としており、いわば世界政治の異なる物語を描いているようだ。それ故、この三つのパラダイム間論争は、現実主義パラダイムに対し二つのパラダイムは對抗的意味をもつてはいてもA対B対Cという非対称的関係の論争というものではない。

三 新現実主義―新自由主義論争

三つのパラダイム間論争は国際関係論にとってそれほど生産的なものではなかったものの、八〇年代に入る段階で、現実主義理論は構造主義的視点を強調する新現実主義理論として登場する。現実主義への二つの対抗パラダイ

ムが、世界政治の中心的主体としての国家に代って脱国家主体を、また、権力闘争や安全保障問題に代って支配・従属構造の存在や経済問題を強調するのであれば、新しい現実主義が世界政治の主体としての国家の復権と国家の行動や国家間相互作用様式に対する権力配分構造の規定性を武器として登場してきたのもきわめて当然であった。

それは、七九年一二月のソ連軍のアフガニスタンへの侵攻を契機としてはじまる新冷戦の開始と、イラン革命の成功の時期と一致していた。新現実主義は、脱国家関係（自由主義）パラダイムに対して、脱国家主体と脱国家関係の重要性を協調することは現実の世界政治の流れとは事実上、相違するとの根拠で、また、ネオ・マルクス主義パラダイムを還元主義に立脚して現実認識を誤っていると反撃する。

K・ウォルツは、国際政治システムを次のように定義することによって、新現実主義の特徴を明らかにする。

(1) 国内システムとは対照的に、国際政治の顕著な特徴は秩序と組織の欠如であると思われる。しかしながら、国際政治システムは経済市場と同様に、自己愛の単位の共同作用によって形成される。両システムとも単位に適用される自助の原理のうえで形成され、また維持される。

(2) 国際的アナキーが続く限り、国際政治システムの単位である国家はそれらが遂行する機能によって公式に多様化されない。国家は、規模、富、権力、形態において広く変化している。相違は機能ではなく、能力である。

(3) アナキー・システムの単位は機能的に多様ではない。そうした秩序の単位は同様な仕事を遂行するための多少の能力によって主として区別される。国家は能力（権力）によって異なって配置され、多くの単位の能力を比較することによって評価される。能力の配分は単位の属性ではなく、むしろシステム規模の概念である。⁽³⁾

他方、H・モーゲンソーを中心とする伝統的現実主義理論は次のような仮説に立脚している。

- (1) 国民国家あるいは政策決定者が国際関係を理解するための最重要な行為者である。
- (2) 国内政治と国際政治との間に明確な区別がある。
- (3) 国際関係は権力と平和をめぐる闘争である。なぜ、いかにしてそうした闘争が起こるのかを理解し、それを規制する方向を示すことが、ディシプリンの目的である。⁽³²⁾

新現実主義と伝統的現実主義との間には、国際システムの主体が主権国家であり、アナキーが支配する中でどの国も権力や安全保障を求めて行動するし、また、国際システムと国内システムとは異質の領域であり、両者を二分できると見ているという意味で、両理論は連続性を有している。しかし、何がネオ(新)なのか、何が両者を区別するのかについて容易に答えられない。⁽³³⁾ たしかに、伝統的現実主義は人間性から論じるが、新現実主義は国際システムのアナキー性に基礎を置くと考えられているが、この条件では両者を区別する明確な基準となっていない。実際に、新現実主義の「ネオ(新)」とは科学の概念である。⁽³⁴⁾ この科学をどう理解するか問題であるが、K・ウォルツは、経済学の論理を使って理論の合理性を求めている。「新しい現実主義は古い現実主義とは対照的に、国際政治システムにとって内面的な要素を外面的要素から区別する問題に対して解決を提示することによって始める。理論は、知的にそれを処理するために他の領域からある領域を孤立させる。分離していると同時に関連性をもつ構造と単位のレベルをもつ国際システム全体を描くことによって、新現実主義は国際政治の自律性を確立し、それについての理論を可能にする。」そうした国際政治学の科学性を志向した上で、システムの構造が相互作用する単位(国家)とそれらが生み出す結果に影響を及ぼすことを明らかにする重要性を強調する。また、国際構造は国家の相互作用から生じ、またそこで国家がある行動をするのを規制するともいう。⁽³⁵⁾

K・ウォルツが、国際システムの国家間の権力配分構造に注目するところから、彼の理論を構造主義的現実主義

と呼んでいい。国際政治を国家行動に還元する還元主義に陥ることなく、構造主義によって体系的かつ科学的法則によって説明しようとの試みが伝統的現実主義と異なる最も基本的な視点である。⁽³⁶⁾

しかしながら、新現実主義理論からの自由主義理論への反撃の過程で、後者も新しい衣をつけて両者の間の論争を八〇年代中頃に構成していく。それは、国際政治の本質や全体的な発展についての全体的な理論をめぐめるものではなく、いくつかのそれほど決定的な重要性をもたない問題を検討することに集中した。新自由主義は、新現実主義が描く世界政治像に全面的に対立するものではなかった。権力問題なり覇権戦争の不可避性に対し、非権力、非戦争による、つまり主体間の協力関係によって、また、その権力関係を形成し、維持し、発展させる制度によって安定した国際システムの実現が可能であることを証明しようとした。こうした考えは、これまでの経済的相互依存世界の形成・発展や、多元的な制度やレジュームの形成とその機能の高まりを反映していた。

「世界政治の制度化の変容は、政府の行動に重要な影響を及ぼす。とくに協力と不協和のパターンは国家行動の意味と重要性を定義するのを助ける制度の文脈の中にだけ理解されうる」⁽³⁷⁾ 世界政治の中で制度がいかに国家間の協力関係を可能にし、国家の行動をコントロールできるかを強調する。そのため、あらゆる協力機能を果す制度として、レジュームのみならず、政府間国際組織、非政府間国際組織、非公式の国際規範のすべてを協力機能を果すものとして国際制度が強調される。国際制度が発展し、増大すれば、国家間の協力関係が増大し、確実なものとなる。これは、自由主義でありながらも同時に、現実の国家行動をも重視する国際制度論であることで、八〇年代後半にネオ（新）がついた。ソ連の新思考外交、東欧諸国の民主化、国際連合の平和維持機能の強化、冷戦の崩壊、欧州統合の進展などの影響で、新しい制度も古い制度もその機能を高めた。

新現実主義と新自由主義との間でどのような対立点が存在するのか。D・ボールドウィンは次の六点を指摘す

(1) 新現実主義は権力政治体系としてのアナキーを重視し、新自由主義以上に国家の物理的安全保障に対する関心を見せる。

(2) 新現実主義は新自由主義以上に、国際的協力の実現を困難とする。

(3) 新現実主義は政策決定者が国際協力を考える場合に、相対的利得を強調するが、新自由主義は絶対的利得の重要性を主張する。

(4) 新現実主義は国家目標の優先順位を考慮する場合、国家安全保障問題を重視する傾向があるが、新自由主義は何よりも政治経済問題を考える傾向がある。そのため、各々は国際協力に対して異なる見通しをもっている。

(5) 国家間の相互作用を見る場合、新現実主義は意図よりむしろ能力に集中するが、新自由主義はより多くの意図や知覚を重視する傾向が強い。

(6) 新自由主義は、制度やレジュームによってアナキーを緩和することが可能だと見るが、新現実主義はそれを疑う。

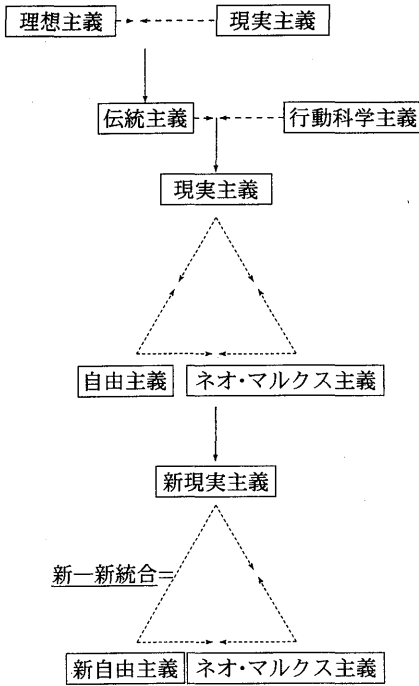
以上の六つの対立点の中でも、とりわけ(3)の相対的利得と絶対的利得が問題となる。J・グリーコによると、国際協力が実現するには、国家はどちらの国も利益を得ることが可能な絶対的利得を求めたのではなく、どちらかの国家が他方よりも多くの利得を可能にしようかのかの相対的利得を求めたのが一般である。そのため、国家間の協力を実現することはそれだけに困難であって、進んで協力関係を形成しようとし⁽³⁹⁾ない。

以上の二つの学派は、反対の方向で制度の効果を評価している。新現実主義者によると、制度はこれが国家にそ

うでなければ行動しないような方法で行動させる程度にしか重要ではない。他方、新自由主義者の主張は、制度が国家に、国家がなしえないこと（協力から相互利益をうること）をさせる程度に重要であるという。前者は、国家行動を制約するものとして制度を考えるが、後者は、相互に利益や強調を生み出すことを可能にするものとして制度を見る。新現実主義理論は、アナキー・システムの存在を前提とする限り、国家間協力に対してアナキーの制約的効果を緩和することができないし、国際制度の能力に対して否定的である。⁽⁴⁰⁾「制度は国家行動に対して最小限の影響しかもちえないし、また、冷戦後の世界において安定を促進する見込みはほとんどはない。」⁽⁴¹⁾

だが、その点を認めても、実際に国際制度や国際協力について新現実主義と新自由主義とは非両立的関係を構成しているのではない。むしろ、後者が大きく前者のもつ仮説に接近し、それを容認していく中で両者の対立点を弱めていく。両者の間での相違点は、各々の理論が国際協力を促がしたり、阻止したりする可能性を強調する程度にあるといてよい。R・コヘインとR・アクセルロードは八〇年代中頃に、新現実主義と大きく共通するモデルを展開した。彼らは、国際アナキーと国家の合理的エゴイズム（国家）という二つの基本的仮説を受け入れた。すなわち、彼らの分析の目的は、アナキー・システムにおいてさえ合理的エゴイストは協力することが可能であること⁽⁴²⁾を示したのである。また、R・コヘインは自らこう認めている。新自由主義者は、新現実主義といくつかの重要な知的約束を共通している。後者のように、前者は分権化された国際システムの本質を説明することによって行動の規制性を説明しようとする。両者ともテキストを解釈することに満足していない。どちらも、部分的に理解されうる国際政治の現実が存在する⁽⁴³⁾と信じている。両者は、その対立的よりも共通点を容認することによって、その論争は意味をかなり喪失していく。しかも両者の基本的対立点であった、アナキーと合理的で単一的主体としての国家の存在を新自由主義が受け入れたことで、両学説の対立点は弱いものとなった。

第九図：新現実主義对新自由主義論争



両学派の理論的枠組みが両立的になったことで、第九図が物語るように、「ネオ・ネオ統合が八〇年代の研究プログラムになった。」との認識も、事実上の結論を出した。現実主義と自由主義は通訳できないものではない。それは合理主義的研究プログラム、科学の概念、アナキー仮説の前提の上で操作しようとする共通の意志、協力の発展や制度が自由であるかどうかを検討することが重要な課題となった。

石田淳氏が述べているように、こうして、新現実主義と新自由主義との間に分析視角の対照性が消滅したのは方法論的必然であったといつてよい。両者は、ミクロの動機がマクロの行動にいかに変換されるかを分析したが、こ

の分析に適していた方法論が「合理的選択」のそれであった。この方法論を使用して国家間の協調の実現可能性を分析する際、現実主義は国際関係において国家を合理的意志決定の主体として認め、またそれ故、選好の安定性という仮説を肯定する。すなわち、新自由主義は、国家を対外的に代表する政府の選好の政府的起源を説明しようとはめざす自由主義の分析視角を放棄したのである。⁴³⁾

以上のように、この論争は新自由主義が新現実主義の基本的仮説を容認していく形で収集し、非両立的な対立軸を構成するものではなかった。しかも、国際協力の問題といっても先進国間のそれが主題であり、先進諸国と第三世界との協力の問題ではなかった。その意味でも、国際政治の現実の一部分をめぐる論争ではない。論争は欧米のそれである。それは大多数の人々の関心をほとんど扱うものではないし、また、国際政治は何らかのアメリカの見解に適していない人々をきわめて効果的に沈黙させてしまう。そして、各々の理論は、国際関係理論における論争が生み出す領域を共に規定する二つの方策というよりも、むしろ国際政治の特定の見解の一部分でしかない。⁴⁵⁾

四 第三の論争・脱実証主義論争

八〇年代末から九〇年代に、新現実主義と新自由主義との論争が収束したことは、国際関係理論をめぐる論争の終焉を意味するものではなかった。実証主義理論として両者が「ネオ・ネオ統合」したことで、新しい論争の舞台を提供することになった。それは脱実証主義理論からの挑戦であった。それが第三の論争⁴⁶⁾とか脱実証主義論争と呼ばれるものだ。国際関係論において最も象徴的な実証主義理論は行動科学理論である。だが、新現実主義理論も新自由主義理論も実証主義理論に他ならない。先の「ネオ・ネオ統合」の意味も、実証主義理論としての統合なの

だ。実証主義理論は、人間の社会世界における科学として世界をあるがままに、正確に描き、適切に説明し、妥当に予測するという、科学性、客観性、合理性を志向する理論だからだ。当然、それら理論の間で、あるがままの対象領域が異なったり、また、どれだけその目標を効果的に達成できるかの程度が相違するこはいうまでもない。

一般的に、社会科学における科学性の証明とは、どの主体の行動様式にも、また、全体の構造による主体間の行動様式に対する影響力にも、規範的要素は存在せず、時空を越えて客観的法則が存在するという前提に立脚している。社会科学における実証主義は結局、自然科学で支配している諸法則をそのまま社会科学に適用したものであり、人間社会科学世界で展開される行動が自然世界の運動と同一次元で理解できる、との原則を堅持している。⁽⁴⁷⁾

過去二〇年ほど、正当性を有する社会理論へ挑戦するさまざまな理論が出現してきたが、四つの主要な主題が存在する。第一は、人間社会と政治の研究に対する実証主義的・経験主義的アプローチの不適切性を強調する問題、第二に、知識の構成過程において、合理主義、自律的個人主義の概念を信頼する主題よりも、社会的、歴史的、文化的主題を強調する問題、第三に、歴史や社会的実践にとって外的な客観的知識の追及を拒否する問題、第四に、現実の言語的構成を強調する問題である。⁽⁴⁸⁾ それら問題の解明を求めるとは一八世紀から今日まで、社会科学の在り方を根本的に支配してきたヨーロッパ啓蒙思想に対する反省と批判、また、それに代る新しい枠組みをもった思想の構築の必要性を意味している。それは、人間社会世界への合理性、客観性、科学性を志向する自然科学モデルの無原則な採用への批判であり、我々の理解の限界を打破するための脱実証主義理論の再構築への動きである。いわば西欧的価値体系なり知識体系の行詰り、その生命力の相対化であると同時に、非西欧的価値体系や知識体系への挑戦なのだ。こうした正統理論への挑戦には、現実の国際関係の大変動があり、グローバル・システムの成立があり、また、人類全体にとっての危機構造の存在がある。実証主義理論がそうした変動を記述し、説明し、予測でき

ないばかりか、その危機構造の克服の可能性も提供できない。どの思想が、どの理論が、どの知識が、どの運動が現実の再構成を可能にするだろうか。その一つの試みが脱実証主義に他ならない。第十図の示す通り、実証主義と脱実証主義との第三の論争は、これまでの論争と異なり、非対称的論争といえる。

国際関係理論としての脱実証主義理論として主なもの五つのグループがある。それらは、批判理論、社会学的国際関係理論、フェミニズム理論、構成主義理論、脱近代主義理論である。

批判理論は、ヨーロッパの啓蒙思想の伝統である知識生産の客観的、合理的、科学的、進歩的様式をもつ実証主義理論を批判的に考察する理論である。批判理論は、フランクフルト学派、とりわけJ・ハバーマスの影響を受け、世界社会の知識は決して中立で、客観的なものではなく、一定のイデオロギーによって生み出されたものと強調する。J・ハバーマスは、知識には経験的—分析的知識（自然科学）、歴史・解積学的知識（意味や解釈に関係する）、批判的知識（解放に関係する）がある。それら知識を構成するとして環境の中の対象に対する支配を広げるための技術的利益、相互作用の中で理解を促進する基盤としての実践的利益、静態的な社会的条件や歪められたコミュニケーションから自由を獲得する基盤としての解放的利益を挙げる。それは人間の潜在性の実現を可能にする条件を探るのに役立つとする⁽⁴⁹⁾。

現実世界での知識の環境はつねに利益やイデオロギーの文脈を前提として考えられねばならないと改めて強調したのが、R・コックスの批判理論である。前述したように、現在のシステムを当然のものとして肯定した上での抱える問題の解決をはかろうとする問題解決理論は、現存のシステムを批判し、システムがいかに発展しうるか、変化しているのか、変革されうるものかを普遍的にその可能性を志向する批判理論に二分する。そして、前者は後者によって取って代わられるべきだという。この問題解決理論と批判理論は、現状維持志向理論と現状変革志向理論

といい換えることができるように、前者は現状の秩序維持のイデオロギーを、また、後者は現状変革のイデオロギーを反映している。⁽⁵⁰⁾ 実証主義理論、とりわけ現実主義・新現実主義は問題解決理論として、また、現状維持志向理論として批判されることになる。

したがって、批判理論の特徴は、客観性を仮定する知識の主体と客体とを区別する実証主義や現実主義のような認識論的手段とは反対に、主体と客体とが結びついて知識を構成しているとの考えにある。すなわち、国際理論としての批判理論の一般的特徴は、(1)認識論の政治的特徴の承認と、主体／客体の二分法の否定、(2)国際システムの歴史的、空間的に構成された特徴の承認と、在存論的所与のものとして現実を捉えることの否定、(3)主体の共通主観的構成の実現と、歴史性の客観的概念の否定、(4)国際関係理論の主要な操作的メカニズムとして包含／排斥の実施の承認と、理論を主体と関係することなく現実の抽象として機能する中立的工夫に見ることの否定、である。⁽⁵¹⁾

したがって、批判理論が、実証主義とりわけK・ウォルツの新現実主義にその批判を向けたのも当然である。彼の理論は明確に定義され、言語は近代経済理論のレンズを通して屈折されたものとしてのカール・ポッパーの科学的方法に基礎を置いて考え出されたものだからだ。K・ウォルツ自身、実証的理論を構築しようとし、また、その実証主義理論は、検証可能な仮説が抽出されうる相互に関連、結合した法則的命題の生産を意味するからに他ならない。⁽⁵²⁾

国際関係と国家社会との有機的関連性に注目する歴史社会学理論も、国内社会をブラック・ボックスとし、国家を合理的・統一的主体として捉え、国際社会と国内社会を単純に二分することを攻撃する。国家というものは国内の勢力と対外的環境との相互作用の産物であるのにもかかわらず、現実主義理論は国内政治と国際政治とを二分化してしまい、両システムの相互作用を無視する。新現実主義は、国内社会の経済的、政治的、社会的、文化的な条

件がどのようなものであろうと、国家行動ならびに国家間の相互作用様式を制約する外的環境として権力配分構造を主張する。たしかに、国家は世界政治において中心的主体の地位を占めてきているものの、国家間の相互作用は、脱国家主体、下位国家主体のますます大きな影響を受け、それらに補完されている。グローバル社会において国家間関係は全体の現象の部分にすぎず、しかも、ますますその部分を減少させている。グローバル社会の文脈の中で世界政治を総体として把握する必要性が、また、グローバルな社会・政治システムの内容の検討が求められている。⁽⁵³⁾ 世界政治の中で国家ばかりか、社会も、また国家と社会の関連性も正当に位置づけられねばならない。実証主義はその要求に十分答えることができず、むしろ本質的にそれを無視、否定する。

これまでの実証主義理論は性的な不平等を容認し、男性支配の知的構造をもつとし、その打破を志向するフェミニスト理論が、認識論的には多元的であるが、最近大きく注目されている。その理論は、性別化（男性化）された役割についての仮説や性別化された知識がいかに国際理論を支配しているかを示す。性について考えることは、国際関係やテキストの中で女性と男性について十分に考慮されることを意味する。フェミニスト理論は、国際関係論やテキストが男らしさ、女らしさがどのように構成しているかを明らかにすることができる。性別化された役割、性別化された知識、性別化された思想がいかに国際関係理論を支配してきたかを明らかにする作業は重要である。この問題は女性の問題としてだけに処理できない。女性と同様に、周辺者、沈黙者、底辺者なども国際関係論やテキストの中で正当に位置づけられることなく、無視されている。彼らは権力を欠如し、また、他者の権力の対象となる共通の分母となっている。⁽⁵⁵⁾ そうした存在を現実世界の中で正当に位置づけていく作業が重要な課題となろう。知識が誰のためにつくった、誰のものを明らかにすることの一つが、フェミニスト理論と違ってよい。

国際システムは、新現実主義者が述べているように、単なる国家間の権力配分構造でも、物質的能力の配分構造

によって支配されているのではなく、規模、概念、ルール、共通主観性などが国家の行動や国家間相互作用関係の様式に大きな影響力をもっている、と構成主義理論はいう。権力配分構造といっても実際は、国家の属性からの単位中心であり、また、世界システム論という資本主義世界システムも、国家の選択や行動を構造的に一方的に規定するといつて、国家の行動能力や独自性をまったく認めない構造決定論であると批判する。主体(エージェント)と構造とは相互に決定的な実体という。両者は互いに相互形成しあい、変容を生み出しあうといふ。⁽⁵⁶⁾

実証主義、とりわけ新現実主義に内在する、主体と客体との二分法の合理主義的仮説、および主体と構造との二元化に挑戦する構成主義は、批判理論とも類似している。現実世界についての知識は、潜在的に存在するのではなく、また、客観的に存在するのではなく、社会関係の中で構成されることが主張される。国家にしる、国家主権も国際システムのアナキーも社会的構成体であつて、主体間の社会的相互作用関係の過程の中で形成される。また、各主体の行動やその様式は合理主義的選択や客観的法則に基づいて規定されるのではなく、規範、概念、共通主観性が大きく国家行動に影響を及ぼすという。

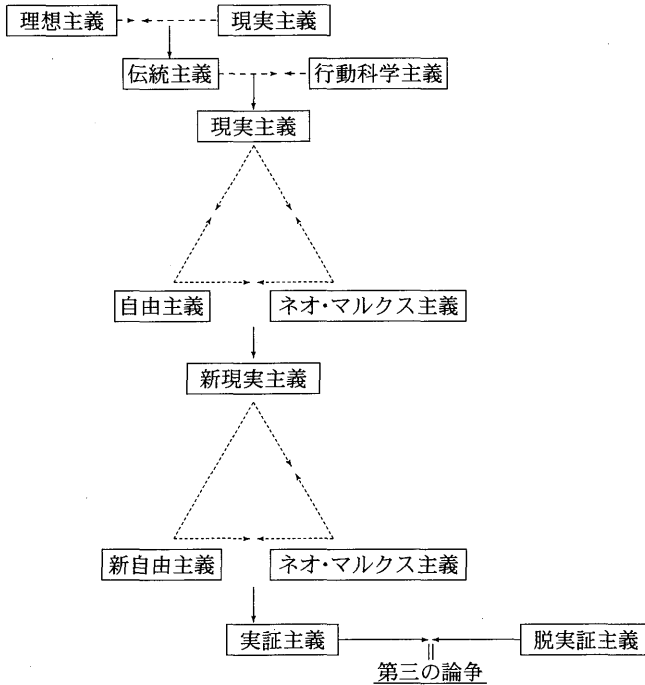
脱近代主義理論はきわめて多様なもので、容易にそれらの内容を一本化することは困難であるものの、その理論は基本的には、近代主義が生み出した現実、事実、真理、アイデンティティ、知識、構造、言語などを全面的に攻撃する。換言すれば、近代主義の大物語である自律的主体、巨大理論、進歩に対する統一的信念が挑戦を受けることになる。それは、我々の国際関係、テキスト間関係、人間関係における変化の結果生じたのだった。脱近代主義運動が展開する中で、客観的現実がテキストに取って代られる。脱近代主義理論の主題は、近代主義物語の正当性を問題にすることだ。⁽⁵⁷⁾

ここでも批判理論や構成主義理論と同様に知識が誰によって、どのように生産されたのかが問題となる。すべて

の知識体系の背後に権力が存在しており、理性や真理のような概念は特定の歴史的状況の建物に他ならない。そのため、真理といっても絶対的なものではなく、変化するものだ、とM・フーコーはいう。近代が創り出した合理性、客観性、科学性、自律的主体性、進歩性は不変的な真理ではなく、一時的な真理ではない。したがって、近代が生み出した実証主義は永遠に支配的な地位を占めることができない。脱近代の今日、現実の世界をアナキートと秩序、内と外、自己と他者とに二分することで現実の世界政治を正確に描き、適切に説明し、妥当に予測することはできない。脱近代主義理論は、実証主義理論を弱者を支配する強者の理論として批判し、その理論の変革を志向する。

以上さまざまな脱実証主義理論の概略を検討してきたものの、それらは実証主義理論と異なり、その本質から多元的な内容をもっており、それらを一元化することは困難であるばかりか、それを一元化する必要性もない。実証主義的枠組みに入らない対抗する主題が多元化しているのは当然ではあるが、多元的な脱実証主義理論はいくつかの共通項をもっている。その共通項は何よりも、「国際理論においてほとんどの実証主義的学風を強調している科学の単純な思想の拒否である」⁽⁵⁸⁾ととりわけ合理主義への批判が積極的である。最大の利益を実現しようと合理的な選択行動をとるとする実証主義理論に対し、合理的行動やその結果は不変のものではなく、行動者の内面的な意識変化、選択の変化、学習、価値観の変容、信条体系の変化、自己をとりまく環境に対する認識構造の変容、また、文化やイデオロギーによっても変化化する。合理的行動を可能にする利益は時間的にも空間的にも固定したものではない。行動者の内面的な意識やその変化を理解することなしに、結果の変容を把握することは困難となる。現実的なもの、合理的なるもの、科学的なるもの、基本的なるもののみを実証主義理論は追及する。現実的でないもの、合理的でないもの、科学的でないもの、基本的でないものと思われる現実⁽⁵⁹⁾は、その理論の議論外となる。そうした

第十図：第三の論争—脱実証主義論争



現実とは現実とはみなされない。脱実証主義理論は、実証主義理論のいう現実、事実、真理、でき事を脱構成し、異なる理論的枠組みによってそれらを再構成しようとする理論といえる。

第二の共通点は第一のそれと連続するものだが、脱実証主義は理論と現実（実践）との関係を、その関係を二分化して結びつけるのではなく、現実が理論を創るという実証主義と異なり、理論が現実を構成するという。いわば理論は単に現実世界を説明するというよりも、現実それ自体を構成する。また、さまざまな知識や概念は所与のものとして、先天的に存在するのではなく、社会的構成物であるとするとする。

第三の共通点は、二元論の克服である。これまでの実証主義は、前述の理論

（知識）／現実（実践）、国内政治／国際政治、主体／客体、個／全体、主体／構造、権力／規範、アナキー／秩序（政府）、内部／外部、事実／価値、男性／女性、自己／他者、連続／変化とすべての現実を二分化する。脱実証主義はそれらは二分化することなく、両者の境界を取りのぞき、相互侵透する現実を再構成しようとする。それぞれのグレー・ゾーンに多くの現実が生産され、展開し、変動している。

第四の共通項は、どの理論にも一定の時代性、イデオロギー性が存在し、その理論の内容を大きく規定している。理論や知識の合理性、客観性、中立性、科学性の確立は困難であり、どの理論も時代性やイデオロギー性を適切に排除できない。そして、理論を現状維持志向性と現状変革志向性に分けられる。実証主義は現状維持志向理論であり、脱実証主義は現状変革志向理論といえる。

第五の共通項は、どの脱実証主義理論も一定の目標をもっている。とりわけ支配からの解放の目標を内包している。支配的理論はつねに自己の支配を正当化して、その理論の維持を計るので、その理論の正当化から解放されなければならぬ。その点に現状変革志向理論が連続していると見てとれる。

五 第三の論争の超克

脱実証主義論争としての第三の論争に、他のそれまでの論争と比較して非対称的論争の関係を構成していた。すなわち、非両立的な理論的枠組みをもつ理論の間での論争といってよい。しかし、実際には、第三の論争はそうしたものではない。同じ一つの世界政治の異なる説明ではない。異なる世界と異なる説明とが結びついている。国際理論の構成要件はいかに現実世界を正確に記述し、適切に説明し、妥当に予測し、現実的規範の問題を処理し、有

効な処方箋を提示することが可能であるかに他ならない。すなわち、いかに有効に現実を再構成することができるかどうかだ。その観点からすると、これまで国際関係理論として支配的地位を占めてきた実証主義理論、とりわけ現実主義や新現実主義理論に取って代って、脱実証主義理論が勝利を収めたのだろうか、そうでないならば、両理論の関係をどう捉えられるか、論争はどう展開されるのか、さらに、両者をのり越える理論を求めていくべだろわか、が問題となる。

たしかに、実証主義理論は、今日の巨大で、複雑で、流動的で、日常的で、不確実な世界政治について有効な国際理論の基準要件としての正確な記述、適切な説明、妥当な予測、現実的な規範、有効な処方箋から見れば、十分にそうした能力をもち合わせていない。そうしたことから、実証主義としての現実主義理論も新現実主義理論も、現実的なものを誤解しているばかりか、過去なるものも系統的に思い違いをしている。⁽⁶⁰⁾このことは、実証主義的アプローチが世界政治の変動によって新しい現実が生じたためのみか、そのアプローチの本質的構造の問題からも、その説明と予測能力を喪失していることを意味する。

これまで見てきたように、明らかに脱実証主義の代表である批判理論による実証主義批判は、現実主義理論の問題や欠陥を適格に指摘している。問題を明らかにするためにここで改めて見てみよう。すなわち、批判理論の主張は、(1)世界社会についての知識は実証的現実への主体の中立的なかわりから生じるのではなく、社会的権力や利益を反映していること、(2)現状の構造は不変ではなく、社会世界の構造はつねに変容していること、(3)マルクスの固有な弱点を克服し、ハバーマスとの著作と結びつけた史的唯物論を再構成するプロジェクトは特に重要であり、生産力は社会と歴史の決定要因であることを否定すること、(4)すべての他者と開かれた政治的共同体の新しい形態を想像すること、である⁽⁶¹⁾。また、R・コックスが述べているように、「存在論はすべての研究のはじめに存在す

る。我々は、重要な主体の種類と、また、それらの間での重要な関係の形態から成るある基本的な構造を仮定することなしに、グローバル政治の中に問題を規定することができない。存在論が歴史を経験し、今度はそれらが構成する世界に土台を形成するようになる。理解において主観的であることが行動を通して客観化する。⁽⁶²⁾

こうした批判理論の実証主義理論に対する批判は正しいとしても、これによって客観主義理論の存在を否定できるのだろうか。すなわち、脱実証主義パラダイムは、実証主義パラダイムに取って代わることが可能なのだろうか。パラダイム転換は起こりつつあるのだろうか。脱実証主義はたしかに、知的生産の客観的、科学的様式としての実証主義の国際関係理論の中で占めている特権的地位に対して重要な挑戦をしているのにもかかわらず、実際は、論争に適切な行動者と国際関係の組織原理の範囲を抽出しようとする試みが中心的課題であった。そのため、どのパラダイムの調査が調査の批判的あるいは内省的・規範的様式を要求しているのか本質的問題、すなわち、権力か支配か、統治か秩序か、どうやって主体性を理解するのか、同一か相違か、などの本質的問題を周辺化したり、また排除してしまった。この原因は論争の逆説的性質にある。そのことは、論争が実証主義を越える動きをして現われるものの、それは、実証主義的、経験的—分析的概念を維持することを意味している。社会関係を理解するための抽象的道具として、世界を映し出す鏡みとして、また、あらゆる世界を描き、分析するための中立的手段としての理論の概念は、パラダイム間論争と第三の論争はメタ理論やパラダイムを分類し、国際関係の適切な主体や、何が関係の組織原理を構成することを決定する際に奉仕した。⁽⁶³⁾ たしかに、脱実証主義が構成理論を志向していても結局、理論や知識の構成化を十分に証明することなく、実証主義が描く現実と異なる領域の現実を説明するに終わっている。

それにもかかわらず、今日の国際関係理論の多くの脱実証主義的アプローチが発見できる。そうしたアプローチ

は、国際関係についての思想の多くの方法ばかりか、他の国際的現実に対しての領域を拡大している。しかし、単一の脱実証主義理論の望みは少ない。何故ならば、批判理論と脱近代主義理論との間におけるように、それらのアプローチは部分的に相互に排他的な認識論的条件が存在しているからだ。実証主義的アプローチに欠点があっても、その役割は大きい。⁽⁶⁴⁾

そのことから、脱実証主義論争で脱実証主義が実証主義に勝利を収めたとはいえない。だが、この論争はどちらが勝って、どちらが負けたという勝ち負けの問題ではない。第三の論争自体が何よりも物語るように、この論争はある超歴史のかつ普遍的な科学的方法の発見でもなく、世界政治についてのある客観的に正当化される真理の達成でもない。それは、論争、批判、新奇性が自由に流動するより内省的な知的環境をむしろ促進させる問題である。⁽⁶⁵⁾「脱実証主義が単一的な理論的枠組みをもっていないことが問題なのではない。それが本質的に多元的性格を内在化させており、多元主義を維持することで論争の意義を高めていく能力が問題なのだ。今日、世界政治が多様な思想的反乱に直面していることを考えれば、むしろその多元化を積極的に評価すべきだ。国際関係論が発展する過程で、この分野で支配的な言語、概念、方法、歴史を問題にする認識論的批判を行なっていることを正当に認めることが必要だ。⁽⁶⁶⁾既存の実証主義的アプローチで描き、説明し、予測できない現実が多数出てくればくるほど、それらを正確に描き、適切に説明し、正当に予測するための新しい言語、概念、方法が構成されることはきわめて当然だ。これまでの支配的な、閉鎖的な、また、非生産的な理論体系を開放する努力は重要な作業となる。

第三の論争は、現実主義に内在する過度の単純化の結果と見てよい。「理論的多元主義は、複雑な世界の多様な現実への唯一の可能な対応である。特定の見通し、あるいは方法論的な正当性を確立しようとするどの試みも、過度の単純化に終るのみであり、また、知識を拡大するための機会を喪失することになる。⁽⁶⁷⁾」過度の単純化は、現実の本

質を容易にかつ有効に説明を可能にするよりも、まさに新現実主義理論がその陥穽に陥っているのだ。

国際関係論の発展、また、現実世界の知識の蓄積にとって、実証主義理論か脱実証主義理論かの選択の問題ではなく、両者をどう相互補完的に組合せるかの問題である。それでは、単一的、一元的な実証主義理論と複合的、多元的な脱実証主義理論はどのような関係を構成しているのだろうか。その場合、どちらが主で、どちらが従であるのか。J・ハバーマスは、知識の背後に見え隠れするイデオロギーの存在を批判しながらも、社会学理論の経験的・分析的アプローチを全く否定するものではない。経験的・分析的な科学による説明と解釈による理解からなる解釈的理解を主張し、社会学理論はそれらの両者の合成であるべきという。⁽⁶⁸⁾

K・ブースは、国際関係理論の目的は、マルクスの科学とモーゲンソーの科学のユートピア的現実主義への収斂をもたらすことだという。すなわち、国際関係理論の問題は、世界を理解することによって世界を変革する試みであり、また、それを変化させることによって世界を説明しようとするということだという。経験主義的・規範的理論は、権力者よりも非権力者、世界政治の特権的な勝利者よりも犠牲者に注目すべきという。⁽⁶⁹⁾

さらに、前述のように、実証主義と脱実証主義は、一つの全体世界を異なる方法で描き、説明し、予測するといふよりも、その世界の異なる部分を対象としている。すなわち、実証主義で説明できない現実を、また、認識できなかったり、無視された現実世界に注意を向けてきた。その意味で、両者は現実世界の全体を描き、説明し、予測する場合は補完関係にあると見てよい。

実証主義理論と脱実証主義理論とを補完的に組合せることによって、現実世界をどのように再構成すべきだろうか。第一は、現実世界の全体的枠組みを明らかにし、その枠組みの上で多元的な現実、事実、でき事を位置づけ、全体と部分との関係と、部分と部分との関係を解き明かすことだ。その上で、多元的な現実の中で何が重要なもの

で、何が副次的なものかを体系的に位置づけることが必要である。多元的な現実をただ並列的に位置づけて、それぞれに意味を与えることができなければ、現実世界は静態的で、現状維持志向性が高まることになる。現実の中心―周辺を明らかにすることで、現実世界を動かすメカニズムの抽出が可能となると同時に、現状変革志向性を高めることになる。

第二に、そうした課題を可能にするためにも、現実世界の全体を、また現実の中心―周辺を体系的に位置づける場合、現実の中心から、中心の目で、思想で、言葉で、価値で周辺を見て現実を描き、説明、予測するのではなく、周辺から、周辺から、周辺の立場、価値、思想、言葉で中心と全体を描き、説明し、予測することが必要だ。周辺から中心を見ることは中心の現実を無視したり、否定したり、歪めたりすることではなく、周辺から見ることによって中心を全体の中で客観的に位置づけることが可能となる。中心から周辺を見た場合に、中心の論理が通用し、中心の立場からの周辺の現実を描き、説明し、予測することになる。すなわち、中心の価値、言葉、概念で、一部でしかない中心から描く現実世界が普遍化し、一般化し、正当化されることになる。現実の世界政治の犠牲者や周辺者、非権力者である第三世界の人々、大国や先進国の被治者の思想、価値、言葉で描く現実世界が普遍的で、客観的なものとなる。

第三は、何度も繰り返しているようにどの理論にも時代性とイデオロギー性を宿しており、その拘束性を認識しない限り、第二の場合と同様に、既存のシステムの支配者や特権者はその現状を維持する志向性が強く、問題解決理論がつねに支配する。現実世界の支配者や強者の描く現実が正当化され、現実が変革されることなく再生産される。現実のシステムの被害者はその現状を変革しようとして試みる。しかし、現状維持志向勢力が強く、その描き、説明し、予測する現実を再生産するし、また、永続化させやすい。それが現実主義や新現実主義が強い証拠である。

現実世界の現状変革の可能性を理論に組み込めるかどうかが課題となる。

そのためにも第四に規範の適切な処理が大切となる。実証主義は現実と規範を二分化し、後者は非現実として現実世界から排除する。しかし、規範は単なる現実と無関係に存在するものではなく、現実離れた空論でも、夢でもない。規範は現実に影響を及ぼし、現実を変え、現実を生み出す。現実的規範あるいは規範的現実と呼ぶことができるように、両者は明確に二分できない。現実の正確な記述も、適切な説明も、妥当な予測作業も能力も規範や価値に影響を受けるし、現実も規範を生み出す。したがって、理論の構築には規範をどう位置づけ、どのような規範がどのように現実を規定し、生み出すかが明らかにされるべきだ。

また、現実を正確に描き、適切に説明し、妥当に予測するためにも、現状の変革を可能にするためにも、さらに規範を正當に現実に取り入れるためにも、二元論（二分法）の克服が必要である。第四の現実と規範の二分化を始め、主体／客体、主観／客観、中心／周辺、個／全体、国内政治／国際政治、近代／脱近代、男／女、合理性／非合理性などの二分法が実証主義を支えてきた。この二分法が現実世界の記述、説明、予測を歪め、現実の変動や変革の可能性に不備い。今日のグローバル政治の時代では明確なる対称的關係、排他的關係として把握できない現象がますます増大している。二分法で分けられた現実と他の現実との境界領域はグレー・ゾーンを形成している。とりわけ国際政治と国内政治とのリンクージ現象は一般化している。国家の特性がいかに国際構造に影響を及ぼし、それを内在化させているのか、また、構造それ自体がいかに国家の特性を内在化させているかを理解する試みとしての理論が、A・ウエントの動態的構造化理論である。

世界政治の一般理論化（大理論化）は、そうした全体と個の関連性、中心―周辺性、変革性、下からの普遍性、規範性、二元論の克服性、などの条件の充足を要求する。そうした視点は実証主義理論にとっても必要とされる

が、その視点そのものは、脱実証主義理論の本質的姿勢である。そうであるならば、『第三の論争』はそうした弁証法的な理論発展の基盤づくりの出発点なのである。⁽²⁾」

注

- (1) Strange, Susan, "Territory State, Authority and Economy: A New Realist Ontology of Global Political Economy," in Cox, Robert W., ed., *The New Realism: Perspectives on Multilateralism and World Order* (Tokyo: United Nations University Press, 1997), p.3.
- (2) Smith, Steve, "Positivism and Beyond," in Smith, Steve, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds., *International Theory: Positivism and Beyond* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p.13.
- (3) Lamborn, Alan C., "Theory and Politics in World Politics," *International Studies Quarterly*, Vol. 41 (1997), pp. 189-90.

今日、とりわけ冷戦構造崩壊後では、国際関係自体が不確定で、不透明であり、さまざまな現実が多元化しているだけに、理論も多元化している。その表れが脱実証主義理論による実証主義理論への挑戦に他ならない。たしかに、第二次大戦後の国際政治の基軸的な現実が冷戦構造の形成・展開・変容・崩壊過程として理解することが可能であり、その現実としての冷戦を現実主義や新現実主義がそれを支えてきたことは否定できない。そのことが、国際政治の現実が冷戦であり、現実主義理論や新現実主義理論がその現実を正確に記述し、適切に説明し、妥当に予測したことを正当化することを意味しない。むしろ現実には、冷戦を超えるものであり、グローバル・ポリティクスの形成・展開過程の中で位置づけることが必要であり、その政治を解き明かし、その意味づけを適切に処理しうる理論の構築が必要なのだ。冷戦と現実主義理論の癒着が、冷戦の変容も崩壊も全く予測できなかったことにつながっている。

- (4) Cox, Robert W., "Social Forces, States and World Order: Beyond International Relations Theory," in Keohane, Robert O., ed., *Neorealism and Its Critics* (New York: Columbia University Press, 1986), pp.208-210.
- (5) 後で詳しく述べるが、三つのパラダイム間論争は世界政治の同じ対象領域をめぐる対立ではなく、異なる対象領域をそれぞれのパラダイムが扱っている。同時に、第三の論争である脱実証主義論争の場合も、実証主義パラダイムと脱実証主

- 義ラダームは結果的に異なる対象を扱っている。
- (9) Zalewski, Marysia and Cynthia Enloe, "Questions about Identity in International Relation," in Booth, Ken and Steve Smith, eds., *International Relations Theory Today* (University Park, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1995), p.298
- (7) Brown, Chris, *Understanding International Relations* (London: Macmillan, 1997), p.4.
- (8) 拙著『国際関係の理論と現実』アジア書房、一九九五年、八一―七頁参照。国際関係論や国際政治学において一般理論の構築は困難であるばかりか、必要なとの考え方もあるが、中範囲の理論（理論の諸島）や個別理論を体系づける理論としての一般理論は可能だし、必要である。すなわち J・J・ルソンのいう「一般意志、全体意志、個別意志の一般意志が、国際政治学の一般理論を意味している。
- (9) McClelland, Charles A., *Theory and the International System* (New York: Macmillan, 1966), pp.6-7（高柳先男訳『国際体系と諸理論』福村出版、一九七九年）二〇頁。
- (10) Vasquez, John A., "The Post-Positivist Debate: Reconstructing Scientific Enquiry and International Relations Theory After Enlightenment's Fall," in Booth, Ken and Steve Smith, eds., *loc. cit.*, pp.230-31.
- (11) Singer, J. David, "The Level-of-Analysis Problem in International Relations," in Rosenau, James N., ed., *International Politics and Foreign Policy*, revised edition (New York: The Free Press, 1969), pp.21-22.
- (12) Donelan, Michael, ed., *The Reason of States: A Study in International Political Theory* (London: George Allen & Unwin, 1978), p.12.
- (13) たとえば、マキヤヴェリ、ホブズ、ロック、ルソー、グロチウス、カント、マルクス、レーニン、ウェーバー、カー、モーゲンソー、ニールバーなどの思想と理論が、古典として今日の国際関係や国際政治の理論として大きな影響力をもちえているのは、その理論の高度な予測能力が高いからだとはいえよう。
- (14) Lieber, Robert J., *Theory and World Politics* (London: George Allen and Unwin, 1973), pp.9-8.
- (15) Zalewski, Marysia, "All These Theories yet the Bodies keep Piling up: Theories, Theorists, Theorising," in Smith, Steve, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds., *loc. cit.*, pp.341-51.

- (16) Ashley, Richard, "Unrulying the Sovereign State: A Double Reading of the Anarchy Problematics," *Millennium: Journal of International Studies*, Vol.17, No.2(1988), pp.227-62 参照。
- (17) Neufeld, Mark, *The Restructuring of International Relations Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), p.33.
- (18) Vasques, John A., *The Power of Power Politics* (London: Frances Pinter, 1983), p.220.
- (19) Zalewski, Marysia and Cynthia Enloe, "Questions about Identity in International Relation," in Booth, Ken and Steve Smith, eds., *loc. cit.*, p.299.
- (20) この場合の現実の世界がいかに客観的な事実であるかどうかは関係はない。現実を現実として理解し、その上でその現実を維持しようとしたり、変革しようとするイデオロギーが、現実を構成することになる。
- (21) 拙著『国際関係の理論と現実』二五頁。
- (22) Brown, Chris, *op.cit.*, pp.36-37.
- (23) Smith, Steve, "The Self-Image of a Discipline," in Booth, Ken and Steve Smith, eds., *loc. cit.*, p.17.
- (24) Zalewski, Marysia and Cynthia Enloe, *op.cit.*, p.94.
- (25) この自由主義パラダイムは、その他「多元主義パラダイム、グローバリズム・パラダイム、脱国家主義パラダイム、世界社会パラダイムとも呼ばれることもある。それぞれは、現実主義パラダイムに包接されない。新しい主体、問題、関係、過程などのどれかを重視して名をつけることで、多元的な呼び方が出てくる。
- (26) 拙著『世界政治の変動と権力—アナキ—国家・システム・秩序・安全保障・戦争・平和—』同文館、一九九四年、一四五頁参照。
- (27) 自由主義パラダイムの場合と同様に、ネオ、マルクス主義パラダイムも、構造主義パラダイム、グローバリズム・パラダイム、世界システム・パラダイム、中心—周辺パラダイム、ラディカリズム・パラダイムと多元的な名称がある。
- (28) 拙著『世界政治の変動と権力』一一五—一七頁参照。
- (29) Smith, Steve, "The Self-Image of a Discipline," pp.18-21.
三つのパラダイムの分類については次に詳しむ。Banks, Michael, "The Inner-paradigm Debate," in Light, Margot.

- and A.J.R. Groom, eds., *International Relations: A Handbook of Current Theory* (London: Frances Pinter, 1985), pp.1-26; Buzan, Barry, "The Timeless Wisdom of Realism?" in Smith, Steve, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds., *loc. cit.*, pp.55-59; Waever, Ole, "The Rise and Fall of the Inter-paradigm Debate," *ibid.*, pp.150-57.
- (30) *Ibid.*, p.151.
- (31) Waltz, Kenneth, N., *Theory of International Politics*(Massachusetts: Addison-Wesley, 1979), pp.88-89.
- (32) Vasquez, John A., *The Power of Power Politics: A Critique*, p.18. なお、サントの現実主義者は次の四つの仮説を賛成してゐると言われている。(1)人間はお互いに主として個人としてではなく、集団のメンバーとして接してゐる。(2)国際問題はアナキーの状態の中で生じる。(3)国際的相互作用の本質は紛争的である。(4)権力は国際政治の基本的特徴である。
- (33) 新現実主義パラダイムも、自由主義パラダイムやネオ・マルクス主義パラダイムの場合と同様にきわめて多元的なものである。K・ウォルトをはじめ、R・キルビン、R・タッカー、C・キンバルハーガー、S・クラスナー、G・モデルスキー・J・シヤンマイマー、B・ブザン、R・パウエル、J・グリーンローが新現実主義者といわれているが、R・ロビンもその仲間に入れられることもある。中でもK・ウォルトが代表的存在であるため、彼の理論が一般的に新現実主義パラダイムとして使用される。
- (34) Waever, Ole, *op. cit.*, p.162.
- (35) Waltz, Kenneth, N., "Realist Thought and Neorealist Theory," in Kegley, Charles W. Jr., ed., *Controversies in International Relations Theory: Realism and the Neoliberal Challenge* (New York: St. Martin's Press, 1995), p.74.
- (36) K・ウォルトが還元主義ではなく、構造主義によつて国際政治を説明しようとの意図をめぐつてのみ、実際は、それと成功することなく、結局は、システムの構造を、各国家のもつ能力(権力)の問題に還元してしまつてゐる。
- (37) Keohane, Robert O., *International Institutions and State Power: Essays in International Relations Theory* (Boulder: Westview Press, 1989), p.2.
- (38) Baldwin, David A., "Neoliberalism, Neorealism, and World Politics," in Baldwin, David A., ed., *Neorealism and Neoliberalism: The Contemporary Debate* (New York: Columbia University Press, 1993), pp.4-11.
- (39) Grieco, Joseph M., "Anarchy and the Limits of Cooperation: A Realist Critique of the Newest Liberal

- Institutionalism," in Baldwin, David A., ed, *ibid.*, pp.151-71.
- (40) Schmeller, Randall L. and David Priess, "A Take of Two Realisms: Expanding the Institutions Debate." *Merson International Studies Review*, Vol.41(1997), p.3.
- (41) Mearsheimer, John J., "The False Promise of International Institutions." *International Security*, Vol.19, No.3(1994/5), p.24.
- (42) Brown, Chris, *op. cit.*, p.49.
- (43) Keohane, Robert O., *op. cit.*, p.8.
- (44) 石田淳「国際政治理論の現在(上)——対外政策の国内要因分析の復権——」(『国際問題』第一五五号、一九九七年五月号) 六八一—七二頁。
- (45) Smith, Steve, "The Self-Image of a Discipline: A Genealogy of International Relations Theory," pp.23-24.
- (46) 実証主義と脱実証主義との論争を第三の大論争と呼ぶことは正しいが、人によって、それ以前の国家中心主義パラダイムとグローバルイズム・パラダイムを第三の論争と位置づけることも多い。そうであるならば、前者の論争は第四の大論争となる。
- (47) 拙著『国際関係の理論と現実』六三三頁。
- (48) George, Jim, "International Relations and the Search for Thinking Space: Another View of the Third Debate." *International Studies Quarterly*, Vol.33, No.2 (1989), p.272.
- (49) Habermas, Jürgen, *Knowledge and Human Interests*, 2nd edition translated by Shapiro, Jeremy J. (London: Heinemann, 1978), pp.113-86 参照。
- (50) Linklater, Andrew, "Neo-realism in Theory and Practice," in Booth, Ken and Steve Smith, eds, *loc. cit.*, pp.255-56. 国際関係論における現状維持志向理論と現状変革志向理論について詳しくは次を参照。拙著『国際関係の理論と現実』九三一—三九九頁。
- (51) Keyman, E. Fant, *Globalization, State, Identity/Difference: Toward A Critical Social Theory of International*

- Relations* (New Jersey: Humanities Press, 1997), pp.3-12.
- (82) Brown, Chris, *op. cit.*, pp.45-6.
- (83) Shaw, Martin, *Global Society and International Relations: Sociological Concepts and political Perspectives* (London: Polity Press), 2001 の 2 章 2 節 2 項 2 号。Halliday, Fred, "State and Society in International Relations: A Second Agenda," *Millennium: Journal of International Studies*, Vol.16, No.2 (1997), pp.215-29.
- (84) Sylvester, Christine, "The Contributions of Feminist Theory to International Relations," in Smith, Steve, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds., *loc. cit.*, p.254.
- (85) Enloe, Cynthia "Margins, Silences and Bottom Rungs: How to Overcome the Undetermination of Power in the Study of International Relations" in Smith, Steve, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds., *ibid.*, pp.186-202.
- (86) Wendt, Alexander, "Is What States Make of It," *International Organization*, Vol.28, No.4 (1990), pp.391-425; — and Daniel Friedheim, "Hierarchy under Anarchy: Informal Empire and the East German State," in Biersteker, Thomas J. and Cynthia Weber, eds., *loc. cit.*, pp.240-45; 西原浩之「東独の国際法上の地位」『東独の国際法』1997年7月号(1997) 111-114頁。
- (87) Der Derian, James and M.J.Shapiro, eds., *International/Intertextual Relations: Postmodern Readings of World Politics* (Toronto: Lexington, 1989).
- (88) Smith, Steve, "The Self-Images of a Discipline: A Genealogy of International Relations Theory," p.26.
- (89) George, Jim, *op. cit.*, p.10.
- (90) Kratochwil, Friedrich, "The Embarrassment of Changes: Neorealism as the Science of *Realpolitik* without Politics," *Review of International Studies*, Vol.19, No.1(1993), p.69.
- (91) Linklater, Andrew, "The Achievements of Critical Theory," in Smith, Steve, Ken Booth and Marysia Zalewski, eds., *loc. cit.*, pp.279-81.
- (92) Cox, Robert W., "Towards a Post-Hegemonic Conceptualization of World Order," in Rosenau, James N. and Ernst-Otto Czempiel, eds., *Governance Without Government: Order and Change in World Politics* (Cambridge:

Cambridge University Press), pp.132-133.

- (63) Keyman, Fuat E., *op. cit.*, p.92.
- (64) Smith, Steve, "Positivism and Beyond," pp.37-8.
- (65) Lapid, Yosef, "The Third Debate: On the Prospects of International Theory in a Post-Positivist Era," *International Studies Quarterly*, Vol.33(1989), p.250.
- (66) Der Derian, James, "Introducing Philosophical Traditions in International Relations," *Millennium: Journal of International Studies* Vol.17 No.2(1988), p.179.
- (67) Holsti, K.J., "Mirror, Mirror on the Hall, Which Are the Fairest Theories of All?" *International Studies Quarterly*, Vol.33, No.3(1989), p.256.
- (68) Sensat, Julius, Jr., *Habermas and Marxism: An Appraisal* (Beverly Hills: Sage, 1979), p.31.
- (69) Booth, Ken, "Dare not to Know: International Relations Theory versus the Future," pp. 347-48.
- (70) 拙著『国際関係の理論と現実』八六頁。